

「油」

(マタイによる福音書 25:1-13)

今日の福音の最後では、主イエスがわたしたちに「目を覚ましていなさい」と命じました。

十人のおとめたちは、「皆眠気がさして眠り込んでしまった」とありますので、賢いおとめも、愚かなおとめも眠ってしまったようです。では、「目を覚ましている」とはどういうことなのでしょう。それは、「油を用意している」ことです。五人の愚かなおとめたちが油の用意をしていなかったのに対し、五人の賢いおとめたちは油を壺に入れてもっていました。賢さを示すしは「油」なのです。

今日の福音は、終末の時を婚礼にたとえています。主イエスと相見えるその時、祝宴に迎えられるか、追い出されるのか、そこに決定的な区別をもたらすものが油です。油は婚礼の行列や、祝宴を照らすための「ともし火」に不可欠なものです。油がなければ、ともし火は消えてしまいます。マタイによる福音書では、ともし火は「善い業」を表すとえとして描かれています（マタイ 5:16 「あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行動を見て…」）。わたしたちはこの世にあって、油に火を灯し、善い業をもってこの世界を照らすことが求められているのです。そのために、神はわたしたちにすでに油を与えてくださっています。その油が切れてしまえば、ともし火は消えてしまい、わたしたちは「世の光」として生きられなくなってしまいます。そして、賢いおとめたちが愚かなおとめたちに油を分けることを断ったことに表されているように、わたしたちに与えられている油は分けることができないものであり、それぞれがそれに明かりを灯し、油を切らさないようにしなければならないのです。

油を切らさないためには、主イエスとの交わりにとどまらなければなりません。愚かなおとめたちは、花婿が到着しようとしているのに、そこから離れて油を買いに行ってしまいました。しかし、それが本当にその時にすべきことだったのでしょうか。もちろん油を用意しておかなかったことは愚かなことです。けれども油が用意されていない「今」、最も大切にしなければならないことは何かを、彼女たちは考えるべきでした。新約聖書において、主イエスと教会は花婿と花嫁にたとえられます。花婿が主イエスならば、主イエスが近くにいられているのに、その場を離れることなど良い選択であるはずがありません。花婿を迎えに出ることこそ、おとめたちが「今」すべきことであったのです。しかし、愚かなおとめたちは油に気を取られ、肝心なことを見失ってしまいました。そこに彼女たちの愚かさがあるのです。そもそも、花婿を迎えることの大切さを感じていたなら、油の用意をしていたことでしょう。そのようにはじめから大切なものを見失ってしまっていたからこそ、愚かなおとめたちは油を切らしてしまったことに気を取られ、もっとも大切な花婿を迎えることができなかつたのです。平素からの主イエスとの交わりを大切にしていなければ、わたしたちも油を切らしてしまう、ということです。

わたしたちの救い主、主イエスとの交わりを妨げているものは何でしょうか。自らのこだわりや、気を取られていることから離れ、「今」しなければならないことはなにか、今一度問いたいと

思います。もっとも大切な主イエスとの交わりの中でこそ、神の目で、「今」わたしたちがすべきことをわたしたちは知ることができます。そのことこそが「目を覚ましている」ことにほかなりません。